

Handwritten Japanese text in cursive (sōsho) style, likely a page from a notebook or diary. The text is arranged in several columns and includes characters such as 知 (Chikaru), 福 (Fukuru), and 徳 (Tokuru). There are also some numbers and symbols, possibly indicating dates or specific entries.

平成20年度

一橋大学附属図書館企画展示

福田徳三とその時代

—日本における経済学の黎明—

ごあいさつ

「福田徳三」という人物をご存じでしょうか。彼は一橋大学の歴史、さらには日本の経済学史を語る上で欠かすことのできない人物ですが、その名前が忘れられつつある今日、馴染みがないという方も少なくないかもしれません。

福田は大正から昭和初期にかけて、我が国で最も名を知られた知識人のひとりでした。彼の死を報じた右の新聞記事からも、彼が社会的に大きな存在だったことがうかがえます。

福田が当時これほどの知名度を誇ったのは、象牙の塔の内に籠ることなく、幅広い分野で活動したためでした。その一端を示せば、

- ・ 『貧乏物語』の著者として知られる河上肇と幾度にもわたって論争を繰り広げる
- ・ 吉野作造らとともに「黎明会」を結成し、積極的に講演を行う
- ・ 内務省社会局参与として社会政策に関与
- ・ 「科学としての経済学」を日本に導入
- ・ 小泉信三・中山伊知郎をはじめとする、一流の学者たちを育てる

といった事績が挙げられます。その死に際し、本学の同窓会如水会は「一橋学園の産出せる最善最美の逸材」との賛辞を呈して悼みました。

一方で、右上の新聞記事の見出しに「強情と温情の逸話を残したチャキチャキの江戸っ子気質」と掲げられたように、福田は大変短気な性格の持ち主でした。彼は東京高等商業学校から慶應義塾、そして再度東京高等商業学校と職場を転じていますが、転職はいずれも学校当局や同僚との衝突に端を発しています。

また、学生たちの間では「こわい先生」との評判で、「ゼミでは先生の意に反すると殴られるおそれがある」という伝説までありました。学生を殴ることはさすがになかったようですが、彼の指導は大変厳しいものだったと複数の教え子が回想しています。しかし、弟子をかわいがることも一方ならず、よく面倒を見ました。短気でありながらも情に篤いところが、「チャキチャキの江戸っ子気質」という評価につながったのでしょう。

このように、福田徳三は篤学者・求道者という側面と無邪気な江戸っ子という側面が入り混じった人物でした。とらえどころがない、それでいて



福田の死を報じた東京朝日新聞1930年5月9日朝刊社会面の記事(部分)

人の心をとらえて離さない魅力に溢れた人物、と評してよいのではないかと思います。

一橋大学附属図書館は、一橋大学後援会の支援によって昨年度から「福田徳三関係資料」のデジタル化を進め、同じく昨年度運用を開始した一橋大学機関リポジトリHERMES-IRにて、インターネット上で資料の画像を公開しています。

本年度の展示は、福田徳三関係資料のデジタル化とHERMES-IRでの公開に歩調を合わせて、福田徳三を取り上げることにしました。本展示を通じ、福田徳三という人物の功績と魅力をみなさまにお伝えすることができれば幸いです。

平成20年10月30日

一橋大学附属図書館

本パンフレット表紙の文言は、「知を求むる者は知を欠くことを知るものならざるべからず(知を求める者は、知を欠くことを知るものでなくてはならない)」と読みます。出典は定かではありませんが、論語の「知之為知之、不知為不知、是知也」、あるいはソクラテスの「無知の知」を福田なりの言葉で記したものと考えられます。

福田徳三とは

生い立ち

福田徳三は1874(明治7)年、刀剣商を営む父徳兵衛と母信子の長男として、東京神田の元柳原町に生まれた。

福田自身が記した年譜によれば、子供時代はクラス一のいたずら者で、成績も落第2回の劣等生であった。それが12歳の時の母の死をきっかけに一変し、学業素行とも優等生になったという。

クリスチャンだった母は、福田の進路として第一に神学校、第二に商法講習所を希望していた。福田は姉の意見に従って後者を選択し、商法講習所の後身である高等商業学校へ進学する。1894(明治27)年に高等商業学校を卒業して神戸商業学校へ赴任するも一年で辞し、母校の研究科に入学して研鑽を積んだ。

1896(明治29)年7月、高等商業学校研究科を卒業。翌々月高等商業学校の講師となり、留学の内命を受けた。

留学と「ベルリン宣言」

1897(明治30)年3月にドイツへと旅立った福田は、ミュンヘン大学にて終生の師となるルーヨ・ブレンターノ(Lujo Brentano, 1844-1931)に出会い、彼の指導のもと、日本経済史に関する学位論文を執筆した。さらに、ブレンターノの尽力によって、学位論文を*Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan*(『日本における社会的・経済的發展』)と題して1900年に出版している。この書にはいくつかの書評が寄せられ、ドイツの学界に少なからぬ影響を与えた。

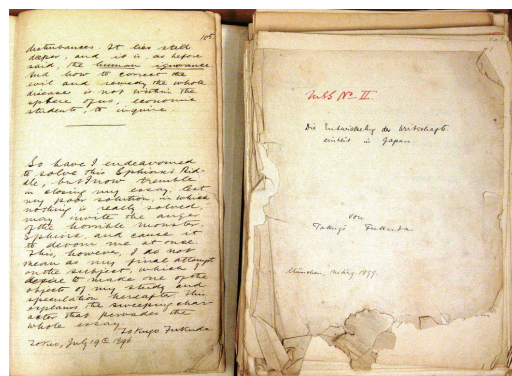
福田は留学中、研究に励むとともに『高等商業学校同窓会々誌』にたびたび寄稿してヨーロッパの商業教育の現状を伝え、日本での高等商業教育の充実を訴えている。商科大学設立は「刻下の急務」と主張した、いわゆる「ベルリン宣言」の起草にも名を連ね、帰国後は教壇から商科大学必要論を熱く説いた。

高商から慶應、そして東京高商へ

帰国から3年後の1904(明治37)年8月、福田は突如休職を命じられた。通説は当時の校長松崎蔵之助との対立をその原因とするが、福田自身は政府の経済政策に反対したことがそもそもの原因だと考えていたようである(同年12月1日付ブレンターノ宛書簡)。

休職の翌年から福田は慶應義塾で教鞭をとり、高橋誠一郎(1884-1982)・小泉信三(1888-1966)らを育てた。しかし慶應義塾でも学校当局や同僚と衝突があつたらしく、辞職と復職を繰り返す。最終的に1918(大正7)年3月に辞職、翌1919年5月に東京高等商業学校(高等商業学校の後身)教授となった。

大正年間には講演や執筆活動を通じてデモクラシーの気運を高め、一躍時の人となる。その後も帝国学士院会員やフランス学士院客員に選出されたり、内務省社会局参与として社会政策に関与するなど、学界内外で活躍を続けた。



左:英語で執筆された高等商業学校研究科卒業論文*Commercial Crises and Depression of Trade*(『商業恐慌と貿易の不振』)一稿における卒業論文第1号である。最終ページに「Tokuzo Fukuda Tokio, July 19th 1896」と署名されている。

右:学位論文*Die Entwicklung der Wirtschaftseinheit in Japan*(『日本における経済活動の発展』)の草稿「München, März 1899」の日付がある。表題の上に朱筆で「MSS No II」と記されているので、第2稿なのかもしれない。

学説とその学問的背景

卓越した語学の才能を備えた福田は、常に西欧の動向に目を向け、それを批判的に摂取して自己の学問体系構築を目指した。以下、ごく簡単に彼の学説とその学問的背景を紹介する。

ドイツ新歴史学派

ドイツ新歴史学派は、抽象的な理論よりも歴史事象の個別具体性を重視して社会改良を目指した学派で、福田の師ブレンターノは、その代表的な論客のひとりであった。ブレンターノは下からの社会改良を主張し、国家の干渉は例外的な場合に限るべきとの立場をとった。

福田が歴史学派の発展段階説を援用して日本社会の後進性に着目した点、また、その克服にあたっては自助を基本とし、社会政策は自助のみでは解決が不可能な場合に限るべきと主張した点に、ブレンターノの影響をみてとることができる。

新古典派経済学

慶應義塾時代、福田はアルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)の『経済学原理』(*Principles of Economics*, 1890)を用いて授業を行った。福田の代表的著作のひとつ『経済学講義』(1907-1909)は、『経済学原理』第1編から第4編までの解説書である。

数理的研究を苦手とした福田がこの方向を追究することはなかったが、門下生の手塚寿郎(1896-1943)・中山伊知郎(1898-1980)らに数理経済学の研究を奨励した。

マルクス経済学

論敵河上肇(1879-1946)によって最も有能・博識なブルジョア経済学者と評された福田は、マルクス経済学の批判的研究者でもあった。早い時期からマルクスの原典に取り組んだ成果が、『続経済学研究』(1913)の第1篇「マルクス研究」である。後に『資本論』の翻訳にも乗り出したが、訳文をめぐる対立から、福田は企画の中心にいたにもかかわらず離脱してしまった。



1925年夏、キーム湖畔(ドイツ)のブレンターノ邸にて
左より、福田、福田夫人、ブレンターノ(『厚生経済研究』より転載)

社会政策・厚生経済学

労働問題を取り上げたブレンターノとの共著『労働経済論』(1899)ですでに社会政策に目を向けていた福田は、1916(大正5)年、アントン・メンガー(Anton Menger, 1841-1906)の生存権の理論に依拠して「生存権の社会政策」を発表し、社会政策の目的を生存権の確保に求めた。

その5年後の「価格闘争より厚生闘争へ」では、賃金闘争はより大いなる満足のための厚生闘争であると分析して、労働運動を正当化した。生存権の社会政策論を発展させたこの論文において、彼はマーシャルやピグー(Arthur Cecil Pigou, 1877-1959)を厚生経済学の先駆者と高く評価しながらも、「価格の経済学」であると批判した。以後、独自の厚生経済学構築を模索し、その努力は晩年まで続いた。最後の著作となった『厚生経済研究』(1930)の序文には、経済学は行き詰まったといわれる中、マルクス経済学に与せず、数理的研究に期待しながらも不得手で着手することができないため、「私に残された唯一の道はホブソン、ピグー、キアナン[キャナン]諸先生が荆棘を拓かれた厚生経済理論への進出これであります」と記されている。

マーシャルやピグーの学説を価格の経済学と批判し、資本主義とも社会主義とも異なる道を模索したことから、福田の厚生経済研究を福祉国家論の先駆けとする評価もある。

行動する学者

如水会は追悼文の中で「実に君は社会厚生のために一身を捧げたる一大学者にして又一大運動者を兼ねたるものと云ふ可し」と述べ、福田が積極的に社会活動に関与したことを称えた(『如水会々報』79)。

ここでは彼が携わった活動のうち、黎明会、関東大震災後の失業調査、そして福田と一橋消費組合の関わりについて紹介したい。

黎明会

黎明会は、吉野作造(1878-1933)と右翼団体浪人会の立会演説会を契機に、吉野と福田を中心として1918(大正7)年に結成された啓蒙団体である。創立相談会に参加したのは吉野・福田ほか5名、創立メンバーはこの7名の呼び掛けに応じた11名を加えた18名であった。

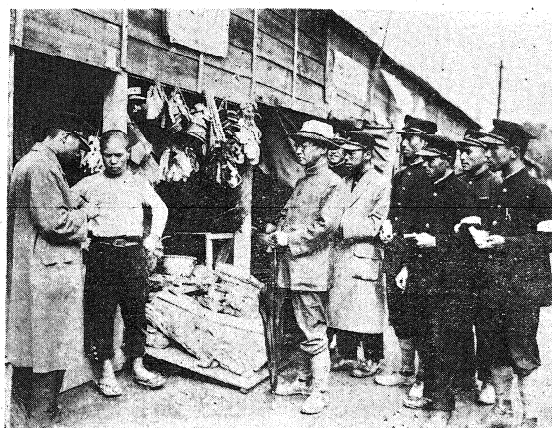
黎明会の主な事業は月1回の講演会と講演集の出版で、1920(大正9)年8月の解散までに講演会は8回開催、講演集は10号が刊行されている。講演は有料だったにもかかわらず毎回盛況となり、大阪での講演の際は5,000人もの聴衆を集めたという。

福田は吉野とともに二枚看板として、第1回から第8回まで、毎回冒頭または最後に講演を行った。近現代史家の大久保利謙(1900-1995)は、福田の講演を傍聴したことを回想し、「大正デモクラシーというのは、福田徳三が提唱者なんです」と述べている(『日本近代史学事始め』p.53)。

関東大震災後の失業調査

1923(大正12)年1月、福田は内務省社会局参与に就任し、社会政策の立案に参画することになった。同年9月の関東大震災に際しては、復興活動の一環として、罹災者の失業調査に乗り出している。

この調査は東京商科大学の学生103名を動員したもので、調査対象となったのは東京市営の集団バラック8カ所とテント村1カ所の計9カ所に



職業調査を行う福田(中央)と東京商科大学の学生たち
(『太陽』第30巻第1号、1924年1月より転載)

暮らす避難者37,000人、調査期間は8日間であった。1日4時間の調査を予定していたが、朝7時から夕方5時までかかったこともあったと福田は記している。

福田と一橋消費組合

ドイツ新歴史学派に学んだ福田の理解では、日本経済が西欧諸国に比して遅れた最大の原因は、団結、すなわち共同行為というものがない点にあり、西欧と同様に人々が団結して共同組織を結成するためには、各自の責任と義務に自覚的な個人の育成が不可欠であった。

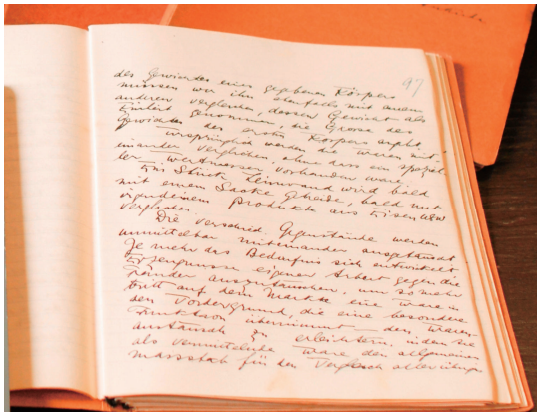
福田は学生たちの個人性を発展させるのもっとも適したのが消費組合だと考え、1902(明治35)年11月、学生自治会である一橋会の発会式において、消費組合の設置を呼びかけた。この席で「学生消費組合設置案」を公刊したいとも述べているが、発表されることはなかったようである。

日本で5番目の学生消費組合となる一橋消費組合が結成されたのは、福田の呼びかけから8年後の1910(明治43)年、ちょうど福田が講師として東京高等商業学校に復帰した年のことであった。

教育者としての顔

厳しい指導

福田の学生に対する厳しさは、在任当時から語り草となっていた。1919(大正8)年に福田ゼミに入った赤松要(1896-1974)によれば、「ゼミでは先生の意に反すると殴られるおそれがある」という伝説もあったらしい(『一橋論叢』44-1、p.87)。しかし、その情熱的な講義に魅了されて、門を叩く学生は後を絶たなかった。



ドイツ語で記された福田の講義ノート

福田の指導について、井藤半彌(1894-1974)は次のように述懐している。

福田先生の学生にたいする指導の方法であるが、研究題目を中心として、先生が外国文献を指定されて報告を命ぜられる。報告といっても、指定された書物または論文の要旨を、二百字詰原稿用紙五、六十枚見当にまとめて書き、報告日の前日か前々日までに、先生の私邸にとどける。先生には、どんなにおいそがしい時でも、必ず精読され、各処に赤鉛筆で横線を引いたり、また短い批評を書かれたりして、報告日に研究室で学生にかえされる。…さて学生は他の学生の前でそれを朗読する。これが、いわゆる研究報告である。出来がわるいときは、報告前でもつきかえされ、やりなおしを命ぜられる。また、下手に批評でもすれば、たいへんである。大学者の労作について軽々に批評するとは何事ぞ、といて叱責される(『福田徳三先生の追憶』p.80-81)。

中山伊知郎の場合はクールノー、ゴッセン、ワルラスを読むように命じられ、在学中はこの3名の代表作を報告した。後年中山からこれを聞いたシュンペーターは、「そういう指導をしたのはだれか」と驚き、大変喜んだという(『わが道 経済学』p.13-14)。

門下生たち

福田の厳格な指導によって外国の文献を精読する方法を身に付けた門下生たちは、日本を代表する経済学者として次代を担っていった。

主要な弟子に絞っても、上田貞次郎・左右田喜一郎・大塚金之助・井藤半彌・赤松要・中山伊知郎・杉本栄一・高島善哉・山田雄三(以上東京高等商業学校～一橋大学)・坂西由蔵・宮田喜代蔵(以上神戸高等商業学校～神戸大学)・高橋誠一郎・小泉信三(以上慶應義塾)・手塚寿郎(小樽高等商業学校)・大熊信行(小樽高等商業学校・高岡高等商業学校)ら錚々たる面々の名が挙げられる。このうち、初期の門下生である上田貞次郎と左右田喜一郎はそれぞれ経営学・経済哲学のパイオニアとして新たな分野を開拓し、福田が手がけた経済史は坂西由蔵、マルクス経済学は大塚金之助と杉本栄一、数理経済学は手塚寿郎と中山伊知郎、経済学史は高橋誠一郎が展開していった。福田がいなかったら、今日の日本の経済学はなかったと言っても過言ではないだろう。

福田は「争論は学問の生命なり」をモットーに、弟子であっても容赦なく批判を加えた(『福田徳三先生の追憶』p.130)。福田の存命中に著作を発表した弟子が少ないのも、発表すれば福田から厳しい批評が寄せられるのが目に見えていたからだという(『中山伊知郎全集』第17集、p.544-545)。

その一方、小泉信三を「麒麟児」と評して世に送り出すなど、弟子に対する賛辞も惜しまなかった。小泉は後に、「博士は人も知る通りしばしば人を過褒し、また過貶したが、褒貶いずれかといえは褒に失する嫌いがあった」と振り返っている(『小泉信三全集』第18巻、p.365)。

福田徳三略歴

- 1874(明治 7)年 12月2日 東京神田に生まれる。
- 1887(明治20)年 5月 母信子死去。以後、優等生となって勉学に励む。
- 1889(明治22)年 7月 商工徒弟講習所補充科2年に入学。
- 1890(明治23)年 9月 高等商業学校予科へ進学。
- 1893(明治26)年 7月 本科3年に進級し、各地の商工業の状況を視察する。
- 1894(明治27)年 7月 高等商業学校を卒業。
9月 兵庫県立神戸商業学校教諭に任命される。
- 1895(明治28)年 9月 神戸商業学校を辞して高等商業学校研究科に入学。
- 1896(明治29)年 7月 高等商業学校研究科卒業。
9月 高等商業学校講師となる。
- 1897(明治30)年 3月 ドイツ留学に出発。
- 1899(明治32)年 5月 国際商業教育会議（於ヴェネチア）に出席する。
- 1900(明治33)年 4月 ドイツ留学中に高等商業学校教授に任命される。
この年 *Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan*（『日本における社会的・経済的發展』）を出版。
- 1901(明治34)年 1月 ヨーロッパ留学中の高等商業学校教員7名とともに、ベルリンにて「商科大学設立ノ必要」を起草する。
9月 4年間の留学より帰国。11月から講義を行う。
- 1904(明治37)年 8月 休職を命じられる。
- 1905(明治38)年 5月 法学博士の学位を受ける。
10月 慶應義塾教員となる。
- 1907(明治40)年 9月 『経済学講義』上巻を出版（中下巻は1909年刊）。
- 1910(明治43)年 1月 東京高等商業学校講師を囑託される。慶應義塾の教員も引き続き務める。
- 1918(大正 7)年 3月 慶應義塾を退職。
12月 吉野作造らと黎明会を結成。
- 1919(大正 8)年 5月 東京高等商業学校教授に任命される。
- 1922(大正11)年 4月 帝国学士院会員に任命される。
- 1923(大正12)年 1月 内務省社会局参与に任命される。
11月 関東大震災後の失業調査を実施。
- 1925(大正14)年 3月 『経済学全集』刊行開始。
5月 帝国学士院会員代表として、第6回万国学士院連合会議（於ブリュッセル）に出席。
9月 ロシア学士院200年祭（於レニングラード）に出席。ケインズとともに、モスクワでの講演を依頼される。
- 1927(昭和 2)年 2月 フランス学士院客員に選出される。
- 1930(昭和 5)年 2月 『厚生経済研究』上巻を出版（下巻は翌月刊行）。
5月8日 逝去（享年55）。

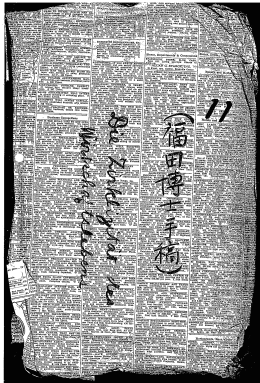


福田の30周年忌にあたり、門下生たちによって附属図書館前に建立された記念碑(清水多嘉示作)

福田徳三関係資料について

附属図書館は、福田の講義ノート・原稿・校正刷り・講演記録など、計260点に上る「福田徳三関係資料」を所蔵している。福田の下で助手を務めた山田雄三元本学教授(1902-1996)によれば、これは福田の弟子にあたる杉本栄一元本学教授(1901-1952)の研究室に保管されていたもので、同教授の急逝後、附属図書館へ移管されたという。

福田徳三関係資料は現在、保存に適した中性紙で資料の形態に合わせて製作された44箱に収納されているが、以前は新聞紙やクラフト紙に包まれた状態で木箱2箱に収められていた。包紙の状態や残された記録から、もともとは「11(福田博士手稿) Die Zirklizität [ママ、福田の論文のタイトルでは Cyclizität] des Wirtschaftslebens」のように番号と内容を記した14包があり、後に2包が追加されたことがわかっている。



福田徳三関係資料が包まれていた、1941年8月3日のThe New York Times

(引用文献)(引用に際しては、適宜表記を改めました)

- 赤松要「一橋の伝統における経済政策思想」(『一橋論叢』第44巻第1号、1960年)
- 大久保利謙『日本近代史学事始め』(岩波新書、1996年)
- 小泉信三『小泉信三全集』第18巻(文藝春秋、1967年)
- 中山伊知郎『中山伊知郎全集』第17集(講談社、1973年)
- 同『わが道 経済学』(講談社学術文庫、1979年)
- 福田徳三先生記念会編『福田徳三先生の追憶』(福田徳三先生記念会、1960年)

なお、参考文献については、Web展示のページをご覧ください。

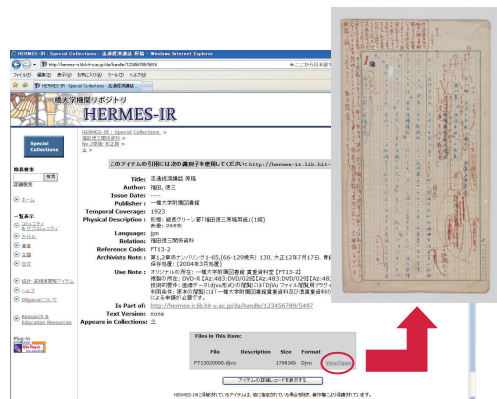
附属図書館後援会事業プロジェクト 非図書資料の整理・修復等事業

附属図書館では、一橋大学後援会による助成事業の一つとして、本学研究者の講義テキストや手稿類、課外活動資料等の本学関係非図書資料に対し、本学の貴重な財産として長期保存のための措置を講じています。また、保存のために電子化された資料は、本学の機関リポジトリHERMES-IRを通じ、インターネット上で卒業生や社会に向けて公開しています。

福田徳三関係資料は現在のところ50%ほど電子化が完了し、公開されています。2009年度には全点が公開される予定です。

福田徳三関係資料のURL:

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/5488>



Web展示のご案内

附属図書館公開展示のページでは、資料の解説を行っています。ぜひ合わせてご覧ください。

<http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/fukuda/index.html>

一橋大学附属図書館
2008年10月30日発行

〒186-8602 東京都国立市中2丁目1番地
URL : http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/index_Ja.html
TEL : 042-580-8252 (学術情報課 学術・企画担当)
FAX : 042-580-8232 (学術情報課)

※本パンフレットに掲載された文章、写真、図版等の著作権は、特記あるものを除いて一橋大学附属図書館に属します。著作権者からの許諾を得ずに、著作権法の定める範囲を超えて、引用、複写、電子媒体化等を行うことは、禁止されています。

本企画において、本学経済研究所西沢保教授にご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。